LGBT 報道ガイドライン

Guidelines for reporting on LGBT

性的指向・性自認の視点から

LGBT法連合会

2019年3月 第1版

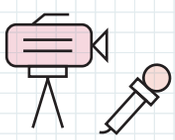
はじめに

「LGBT」等、性の多様性についての報道が増え、偏見や差別をなくしていく力ともなっています。同時に、社会に偏見や差別が今なお残っているため、報道によって当事者が苦しめられることもあります。取材者の認識不足で取材対象を傷つけたり、当事者が意図せぬ形で報道の影響が広がったりしないよう注意が必要です。そのような事例に関する相談を受けてきたLGBT法連合会は、記者や当事者の意見を参考に、メディアガイドラインを設けました。記者向け、当事者向け、それぞれの注意点や用語集などから成り立っています。取材する側、される側が相互に理解を深め、報道を通じて性の多様性が尊重される社会を実現する一助となることを願っています。

そもそも「取材」「報道」とは？

News Report

取材とは

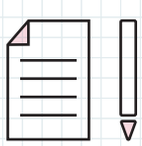


テレビ局や新聞社、通信社、ウェブメディアなどの記者が、人に話を聞くなどして、記事や番組の材料を集めることを、取材といいます。報道にあたっては「人間の尊厳に最高の敬意を払い、個人の名誉を重んじプライバシーに配慮する」（日本新聞協会「新聞倫理綱領」）ことなどが求められます。

取材から報道まで

取材から、実際に報じられるまでの過程では、取材した記者以外の人たちも関わります。記者に指示し、記事や放送内容を確認する人、記事の見出しや番組のテロップをつける編集作業をする人、紙面や番組での構成を決める人などです。たとえば記事の本文は問題なくても、おかしな見出しがつくなど、取材した記者の意向や力だけではままならないこともあります。

取材する・される時は



性に関わる話は、人の尊厳と、時に命にも関わります。取材者は人の内面に踏み込む繊細な取材であることを肝に銘じましょう。また多様な性についての公教育が行われていない現状では、取材者自身が無自覚なまま誤解や偏見を抱えている可能性があります。取材者は「自分は理解がある」などと思い込まず、謙虚に学んだ上で、十分な理解と最大限の配慮のもとに取材に臨みましょう。一度世の中に出た内容は取り消すことができません。取材を受ける側は、報道によって世の中に課題を伝えられるメリットもあるが、デメリットもあることをよく考えましょう。

メディアの違い

メディアによって、取材のやり方や報道の仕方には違いがあります。新聞社やテレビ局がウェブにも同じ内容を掲載することも多くあり、どこで報じられるのか、読者や視聴者はどのように情報を受け取ることになるのか、よく確認した方がいいでしょう。ウェブ上では、その社のサイトだけでなく、その他のニュースサイトなどに転載されることもあり、また個人が勝手にネット上に掲載することもあります。SNSで拡散されたり、検索すればいつまでも見られたりする可能性もあります。特に実名や顔を出す場合や、特定の範囲に知られたくない場合には、細心の注意が必要です。

LGBT 基礎知識

Gender and Sexuality

LGBT とは

LGBT とは、レズビアン（女性同性愛者）、ゲイ（男性同性愛者）、バイセクシュアル（両性愛者）、トランスジェンダー（出生時に割り当てられた性別とは異なる性を自認する人）の頭文字から取った言葉で、性的マイノリティの人たちを表す言葉として用いられることがあります。

そもそも、性のあり方は以下の 4 つの性の要素により構成されています。

1. 戸籍の性：出生時に割り当てられた性別をもとに戸籍等に記載された性別
2. 性自認：自分の性別をどう認識しているか
3. 性的指向：恋愛感情や性的な関心がどの性別に向いているか
4. 性表現：服装やしぐさ等、自分の性をどう表現するか

このうち、性的指向（Sexual Orientation）と性自認（Gender Identity）の頭文字をとった「SOGI（ソジ）」という言葉が用いられることもあります。

多様な性のあり方

性的指向が異性に向いている人はヘテロセクシュアル、性自認が戸籍の性と一致している人をシスジェンダーと言います。

恋愛的感情の有無にかかわらず、他者に性的に興味関心を抱くことがない人をアセクシュアルと呼びます。性的関心・興味の有無や強さも性的指向の観点からとらえることができます。

注意が必要な言葉や概念

「性」に関する言葉の中には、歴史的に侮蔑的な意味合いで使われてきた言葉もあります。また、現状に合わない言葉もあり、使用する際には注意が必要です。

- ☐ 性転換手術：実態に合わないため、使わない方がよい。→性別適合手術
- ☐ オカマ：いわゆる「女っぽい男」等を指す言葉だが、侮蔑的なニュアンスが強い。
- ☐ オナベ：いわゆる「男っぽい女」等を指す言葉だが、オカマ同様に侮蔑的なニュアンスを含む。
- ☐ おとこおんな：いわゆる「男っぽい女」等を指す言葉だが、オカマやオナベと同様に侮蔑的なニュアンスを含む。
- ☐ オネエ：女性的に振る舞う男性で、ゲイに限らない。
- ☐ ニューハーフ：主に飲食店やショービジネス界で働くトランスジェンダー女性を指す。トランスジェンダー当事者の中には侮蔑的と感じる人もいる。
- ☐ レズ：レズビアンの短縮形だが、歴史的に侮蔑的な意味合いで使われてきたため避けるべき言葉。
- ☐ ホモ：ゲイを指すことが多い言葉だが、歴史的に侮蔑的な意味合いで使われてきたため避けるべき言葉。

ただし、当事者の中には、上記の各用語をあえて使う人もいます。
また、時代や社会、文化によって使い方は変わることもあります。

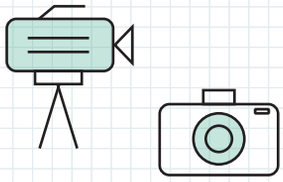
カミングアウトとアウティング

Coming out, Outing

自分の性のあり方を自覚し、誰かに伝えることを「カミングアウト」と言います。LGBT の当事者にとって、依然としてカミングアウトは極めて困難な状況です。なぜなら、自らの性のあり方を明らかにすることによって、より一層の差別や偏見を受けてしまうことが懸念されるからです。「一般社団法人社会的包摂サポートセンター」がまとめた専門電話相談の 2016 年度の報告書においても、学校や職場において自らが LGBT であると明かしている人は 16.1% に過ぎないという結果が出ています。また、本人の性のあり方を同意なく第三者に暴露してしまうことを「アウティング」と言います。アウティングは、プライバシーの侵害につながり、生命に関わる程の深刻な影響をもたらす可能性があります。裁判の事例もあり、取材をする／される際に、アウティングとならないよう細心の注意が必要です。

取材を「する」際のチェックリスト

記者向け



1 LGBT や性の多様性に関する基礎知識を身につけましょう

- ☑ LGBT や性の多様性に関する基礎知識を身につけておきましょう。前述の「LGBT 基礎知識」を参考にしてください。
- ☑ 自分の性のあり方を基準にしないようにしましょう。例えば「(LGBT ではない）ふつうの人」という表現や同性愛を「禁断の愛」と表現する等、異常・異質なものとして位置付けないよう注意しましょう。

2 取材相手に以下のことを確認しましょう

- ☑ 「アウティング」はその人の居場所を奪ってしまいプライバシーを侵害してしまう恐れがあります。アウティングを防ぐために、取材対象者がどの範囲にまでカミングアウトをしているか確認しましょう。
- ☑ 掲載された情報がどのような媒体に掲載・転載されるかを伝えましょう。また、取材相手の家族や友人、仕事関係の人に知られる可能性があることを説明しておきましょう。
- ☑ 名前（匿名か実名か)、顔出しの有無など、公開可能な個人情報の範囲を確認しましょう。
取材相手（や保護者）が顔や名前を出すことに同意していても、将来的に再び隠す必要があるときもあります。未成年はもちろん、就職前の学生などは将来のリスクを認識できているとは限りません。本当に情報を公開して良いか、将来のリスクなど改めて説明した上で慎重に確認しましょう。

3 「性」に関する表記の仕方に注意しましょう

- ☑ 本人の性のあり方は本人しか決められません。相手の性のあり方を決めつけず、本人の表現を尊重しましょう。過去の記事に頼らず、書き方を変える場合は本人に確認をとりましょう。
- ☑ 見出しが本人の性のあり方を尊重し、適切な表現になっているか等、デジタル版や各版も含めてチェックしましょう。
- ☑ トランスジェンダーの性別に関する表記は戸籍上の性別ではなく本人の自認を尊重した上で対応しましょう。戸籍上の性別を出されたくないという方もいます。また、人称代名詞が「彼女」や「彼」、それ以外なのか等も注意し、本人に確認しましょう。

Tips：性的指向などの情報の慎重な取り扱いについて

性的指向や性自認（SOGI）の情報については、慎重な取扱いを求める取り組みが国内外の公的機関で広まっています。国の個人情報保護委員会は、企業などが「性的指向」や「性生活」の情報が含まれる個人データを一定の要件の下で取得する場合、本人同意が必要であるとしています（報道機関は対象外)。海外でも、例えばカナダのオンタリオ州が 2000 年に策定した性的指向や性自認の差別やハラスメントに関する方針の中で、主な課題として情報の機密性保護を挙げています。

取材を「される」際のチェックリスト

当事者向け

1 取材を受ける前に以下のことについて認識しておきましょう

- ☑ 顔を公開してよいか、名前まで公開してもよいのか、自身の情報について改めてどこまで公開できるのかを確認・整理しておきましょう。
- ☑ 集会、デモ、イベントなど公の場で話したことは、報道されてしまってもやむを得ない場合があります（もっとも、公の場で表現してしまったことについて報道されたくないと思った場合、記者に報道してほしくない旨を申し入れれば対応してくれる場合もあります）。
- ☑ 報道されたことによって、好意的な反応だけでなく、ネガティブな反応が出てくることを想定しておきましょう。
- ☑ あなたが話したことが、あなたの身の回りの人のアウティングにならないように留意しましょう。
- ☑ あなたの性のあり方をどういう言葉で表現するか、今一度確認してみましょう。
- ☑ 話したくないことは話さなくて大丈夫です。取材を断ってもかまいません。

2 取材を受ける前に以下のことについて確認しておきましょう

- ☑ 公開してもよい情報の範囲、報道にあたって配慮してほしい表現・事柄等についてもしっかりと記者に伝えましょう。
- ☑ 公開される媒体は、新聞なのか、ウェブなのか、テレビなのか等、どのようなものか確認しましょう。
- ☑ 記者の取材の目的や趣旨を確認しておきましょう。
- ☑ 必要があれば付き添いの人を連れて行ってよいか、記者に確認してみましょう。

3 記事の公開前後に以下のことを確認しておきましょう

- ☑ 報道の内容が間違っていれば訂正や修正を求めることができます。ただし、訂正や修正に応じてもらえるかはメディアによります。不安がある場合は、掲載前に発言内容や表現について、相談や確認を求めてみましょう。

コラム

LGBT 取材・報道の課題　- アンケート調査から -

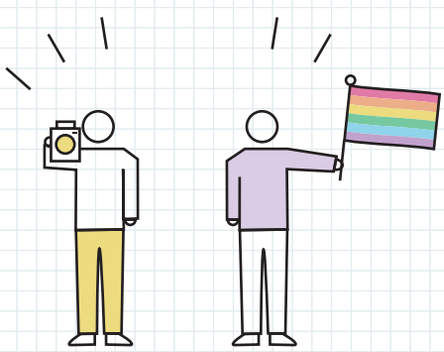
A さん（新聞記者）

LGBT に関する取材を受けた経験のある人たちを対象に、2018 年 4 月に実施された毎日新聞のアンケート調査によると、回答者 70 人中、「記者が勉強不足だと感じた」人は 46 人に上りました。次いで、「セクシュアリティに関し、特定のイメージを押しつけられた」人は 32 人、「取材時やできあがった記事、番組上で、自分の性自認や性的指向が尊重されていなかった」人は 18 人と、取材や報道に関し当事者がさまざまな困難を経験していることが明らかになりました。具体例としては、性的指向と性自認の混同や、「（差別語である）レズと言われた」「同性を好きになるなんて理解できないと笑われた」「新聞社での取材で、（性自認を伝えてあるにも関わらず）自認とは異なる性別のトイレを案内された」など、取材者の問題のある言動が多く寄せられました。その他、無許可で写真を撮られた、交流会の開催場所を勝手に書かれた、といった声もありました。こうした報道は本人の同意なくセクシュアリティを暴いてしまう「アウティング」となる恐れがあります。また、過去 5 年間の LGBT に関する報道で違和感を覚えたことについては、「誤った用語の使い方や説明」が 54 人、「ステレオタイプな描き方」が 51 人、「差別的な言葉づかいや表現」が 25 人という結果でした。「誤った用語の使い方や説明」の関連では、たとえば一人のゲイの人の話なのに「LGBT 男性」とするなど、「LGBT○○」と一括りにされた見出しを、近年よく目にします。「ステレオタイプな描き方」は、LGBT は「かわいそうな人たち」あるいは「優秀」「おしゃれ」、トランスジェンダー男性なら「人形遊びとスカートが嫌だった子ども時代」…といった、ありがちなイメージや取材者の思い込みが当てはまります。こうした報道は当事者を傷つけ、誤った認識を社会に広めてしまいます。

無意識の思い込みの怖さ

B さん（テレビ記者）

性別違和を抱える人たちの集まりを取材した時のこと。参加者の方たちの性自認の表現や発言内容については、可能な限りご本人に個別に説明し、慎重に確認したつもりでした。その時の参加者は戸籍上の性別が全員女性だったため、記事で「体の性別は全員女性だが、性自認は～」と書いたところ、参加者のお一人から「自分は体の性は言って欲しくなかった」と言われました。その方は顔も出ない形で集団の中の一人という位置づけでのご紹介でしたが、その性のあり方に関する表記は掲載後に削除しました。自分の中で、性自認や性的指向に比べて、戸籍上の性別（体の性）については、デリケートな事柄ではないという無意識の思い込みがあったのだと思います。他にも、性的マイノリティの人たちの取材を始めた頃は、トランスジェンダーの方の性的指向は、MtF トランスジェンダーなら男性が好き、と異性愛だと思い込んで話をし、注意されたこともありました。そもそも恋愛感情や性的な興味関心が他者に向かない人もいます。無意識の思い込みが事実誤認につながったり、相手を傷つけてしまったりすることをこれまでの失敗の中で痛感しています。



LGBT 男性 / 女性は存在しない　C さん（新聞記者）

「LGBT 女性、かがやく」――。わたしが記事を書いている新聞に、このような見出しのコラムが載りました。北陸に暮らすレズビアン（女性同性愛者）が両親との葛藤を経て、自らの生き方を肯定するまでをたどっています。淡々とした筆致の中にも、先輩記者の鋭い問題意識がうかがえました。それでもこのコラムには問題があります。「LGBT 女性」という見出しが本文を台無しにしています。そもそも「LGBT」は、性的マイノリティの人々を表す言葉としても用いられる言葉です。それを特定の「個人」に当てはめると奇妙なことになります。「LGBT 女性」とは、レズビアンでありつつゲイでもあり（？）、バイセクシュアルかつトランスジェンダーでもある女性になってしまいます。1 人で 4 つの人格を持っているような書きぶりです。ある人を「LGBT 女性／男性」と書くのは避けた方がよさそうです。

見出しをつけた整理部の記者は仲のいい同期でした。「『レズビアン』や『同性愛』だと直接的だから『LGBT 女性』にした」といいます。確かに LGBT という言葉にはポップな響きがあるかもしれません。メディアが性的マイノリティの話題を取り上げやすくなったのも、LGBT という造語の無味無臭なイメージが大きいのかもしれません。とはいえ「直接的な言葉を避けたい」という心理の底には、性的マイノリティをめぐる問題の核心から目を背ける意識が見えます。例えば、選挙で性的マイノリティの権利を守るべく活動してきた人物を「LGBT 候補者」と表記するのは、必ずしも誤りとは言えません。LGBT という言葉そのものが、運動の文脈で生まれた概念に他ならないからです。性的マイノリティの報道では「総称か個人か」を問い直す視角も大切ではないでしょうか。

名前の使い分けの難しさ　D さん（トランスジェンダー）

名前を見れば性別がだいたい想像できます。そのためトランスジェンダーが性別移行を進めると、見た目と名前の人とが別人のように思われて、日常生活で不審がられたり、不便が生じることがあり、それを避けるために（戸籍の名前は変更しないまでも）別名を使っている人が多くいます。私もひっそりと下の名前を別名にしたのですが、LGBT/SOGI の活動にかかわり、だんだん取材も受けるようになり、悩んだり困ったことがありました。職場等では従来の名前を使っていますが、仕事と活動とが関係する分野であることや、仕事上で取材に応じる機会もあることから、使い分けが難しい状況です。

この使い分けは、イベントなどでの声かけでもリスクとなることがあります。取材の際の（戸籍名でない）通名で声をかけても知人や同僚がその場にいることもままあり、不審に思われる可能性があるからです。「こんにちは。お世話になっております。」など、誰が聞いても不自然でない声かけなら安心できます。

報道していただく意義は実感しており、なるべく協力させていただきたいのですが、このような例もあるので、2 度目以降の取材であっても、名前やプロフィールの書き方等について、その都度丁寧に確認していただけると、安心し余裕を持って取材に応じられます。

当事者・報道機関のすれ違いによる不幸と それを乗り越えるためにできることを

LGBT 法連合会事務局長　神谷悠一

2018 年 7 月、東京で行われた街頭での抗議行動には、たくさんの当事者が参加し、思い思いのスピーチの中で感動的な言葉も数多く飛び出しました。その模様は、動画や写真付きの記事としてインターネット上や各種媒体を通じて拡散、日本列島に大きな衝撃を与えました。この街頭行動に参加しマイクを握った当事者の中には、都心から離れた地域で、普段は自分が当事者であるとカミングアウトすることなく、ひっそりと暮らしている人もいました。ある方は、街頭でマイクを握った後に、インターネットを通じて自分の発言に対する動画やツイートが拡散され、SNS 等で大きな共感や賞賛が寄せられていることに気がつきました。初めは共感が広がっていることに気持ちも高まったのですが、そのうち共感や賞賛に混じり悪意のコメントが散見することに気がつきました。気になってたどっていくと、自分の知り合い、過去に仲の良かった人びとからも寄せられていることに気がつき、パニックに陥ったと言います。

「LGBT」等、性的指向や性自認が非典型な当事者は、今の日本において、誰もが自由に自分が当事者であると開示できる状況 にはありません。日々の生活の中で差別や偏見を受けないように、生存戦略としてひっそりと息を潜めていることも少なくありません。息を潜めざるを得ない中で、息を潜めて暮らすことこそが正しいことであると、自分に言い聞かせる当事者もいます。そんな人たちにとって、街頭で堂々と「自分は当事者である」と話す姿が、恐怖を抱く対象、悪意を向ける対象となったとしても、決して不思議ではありません。

話は戻り、先ほど紹介した方はパニック状態も冷めやらぬうちに、今度は自分の暮らす地域の地元紙に、大きな見出しのついた、自分の「名前」と「写真」、さら に自分が「当事者である」ことの 3 点がセットとなった記事を見て、驚愕したと言います。確かに自分はあの場で発言し、その後の取材にも答えた。しかし、なぜこのような個人情報が明るみに出る見出しが付いたのだろうか。先だっての悪意あるインターネットの状況に追い討ちをかける形となり、頭が真っ白になったと言います。そのまま大きく体調を崩し、人と会うのが怖くなり、半年経った今でも、以前の調子に戻らない状況が続いていると言います。

残念ながらこうした例はこれまでも少なくありませんでした。マスコミに取り上げられた際、意図せぬ個人情報が出てしまった、あるいは、その時は大丈夫だと思って出した個人情報も、放映後の反響が大きくなったことによって、その反動としての差別や偏見も受けてしまった。結果、地域で生活することに大きな支障をきたしてしまった。そんな声はよく聞かれます。体調を崩す場合も珍しくありません。前述紹介したケースでその方は、自分が街頭の抗議行動でマイクを握ったことが「自分の地域で、写真と名前、当事者であることがセットで報じられることにつながるとは思わなかった」と語ります。報道機関から見れば、なぜそう思うのか不思議に思うかもしれません。けれど、メディアとの関係に慣れていない当事者から見れば、「あくまで報道されるのは現場に近い (もしくは情報が密な) 東京や首都圏だけだろう」と思うこともあります。暗黙のルールが共有化されているとは限らないのです。報道の力は確かに、差別や偏見をなくす大きな推進力となることがあります。その一方で、当事者の置かれた入り組んだ差別構造の中で、その力があらぬ方向にはたらき、当事者を深く傷つけることもあります。報道の自由を前提としながら、報道機関、当事者双方が、これ以上不幸なすれ違いを繰り返さぬため、それぞれに考えること、そして取り組むことが求められているように思います。

用語集

あ

- アウティング (Outing)：本人の性のあり方を、同意なく第三者に暴露してしまうこと。
- アライ (Ally)：多様な性のあり方に理解のある非当事者で、支援者、応援者のこと。
- アセクシュアル（Asexual）：恋愛的感情の有無にかかわらず、他者に性的に興味関心を抱くことがない人。
- エックスジェンダー (X-gender)：自認する性別が男女どちらでもない、どちらとも言い切れない人。あるいはいずれにも分類されたくない人。
- エフティーエム (FTM、Female to Male)：出生時に割り当てられた性別が女性で、自認する性別が男性である人。トランス男性とも言う。
- エムティーエフ (MTF、Male to Female)：出生時に割り当てられた性別が男性で、自認する性別が女性である人。トランス女性とも言う。
- エルジービーティー (LGBT)：Lesbian(レズビアン)、Gay(ゲイ)、Bisexual(バイセクシュアル)、Transgender (トランスジェンダー) の頭文字をとった言葉 。性的マイノリティの人たちを表す言葉として用いられることがある。

か

- カミングアウト (Coming-out)：自らの性のあり方を自覚し、それを誰かに開示すること。
- クエスチョニング (Questioning)：自らの性のあり方などについて特定の枠に属さない人、分からない人。典型的な男性・女性ではないと感じる人。
- クローゼット (Closeted、in the closet)：自らの性のあり方を自覚しているが、他の人に開示していない状態。押し入れに隠れている状態に例えて言う。
- ゲイ (Gay)：性自認が男性で、性的指向が同性に向く人。男性同性愛者。

さ

- シスジェンダー (Cis Gender)：出生時の性別と性自認が一致し、それに沿って生きる人のこと。
- 性自認 (Gender Identity)：自分の性別をどのように認識しているかを示す概念。俗に「心の性」と呼ばれることもある。
- 性的指向 (Sexual Orientation)：恋愛や性的関心がどの対象の性別に向くか向かないかを示す概念。恋愛・性愛の関心が異性に向かう異性愛 (ヘテロセクシュアル)、同性に向かう同性愛 (ホモセクシュアル)、男女両方に向かう両性愛 (バイセクシュアル) などがある。俗に「好きになる性」と呼ばれることもある。

- 性同一性障害 (GID、Gender Identity Disorder)：性別違和のなかでも、特に精神神経医学的な診断基準を満たした人のこと。GID と略される。
- 生物学的な性 (Sex)：生物としてのヒトを「メス / オス」という 2 つのカテゴリーに分別する生物学的知見。
- 性分化疾患 (DSDs、Disorders/Differences of Sex Development)：染色体、生殖腺もしくは解剖学的に性の発達が先天的に非定型的である状態を指す用語。
  ※「Differences 」を「Diverse」と表記する場合も見られる
- 性別違和 (Gender Dysphoria)：2013 年に改訂された「精神障害診断の手引き第 5 版 (DSM-5)」で、「性同一性障害」に代わって使用されている名称。出生時に割り当てられた性別と性自認の不一致を感じている状態を指す。性別違和そのものは精神疾患でないとされている。
- 性別適合手術 (SRS、Sex Reassignment Surgery)：トランスジェンダーのうち、手術前の身体の性的特徴に対して強い違和感や嫌悪感を抱いている人に対し、内外性器の形状を性自認に合わせるために行う外科手術。
- セクシュアリティ (Sexuality)：性のあり方の総称。
- セクシュアル・マイノリティ (Sexual Minority)：性的少数者のこと。正常、規範的などとされている性のあり方の周縁に位置する人々の総称。レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル トランスジェンダーなどを含む。LGBT の人々を総称して使うことが多い。
- ソジ (SOGI)：「性的指向 (Sexual Orientation=SO)」と「性自認 (Gender Identity=GI)」の略。

た

- トランスジェンダー (Transgender)：出生時に割り当てられた性別とは異なる性を自認する人。

は

- バイセクシュアル (Bisexual)：性的指向が男女どちらにも向く人。両性愛者。
- ヘテロセクシュアル (Heterosexual)：性的指向が異性に向く人。異性愛者。
- ホモセクシュアル (Homosexual)：性的指向が同性に向く人。ゲイは男性同性愛者、レズビアンは女性同性愛者。

ら

- レズビアン (Lesbian)：性自認が女性で、性的指向が同性に向く人。女性同性愛者。

あとがき

LGBT 、性的指向・性自認 (SOGI) に関する当事者運動は、2015 年前後からの社会的な機運を受けて急速に拡大しました。都市部だけでなく、日本全国各地で、多くの当事者が立ち上がり、声を上げる機会も多くなってきています。ただ、短期間で新たな運動の担い手が増えたことにより、メディアと当事者との関係にも、思わぬすれ違いが見られています。

私たちは、報道の自由が民主主義社会の重要な価値であることを前提にしながら、このすれ違いを看過せず、双方が良かれと思ったことでこれ以上不幸を引き起こさないよう、できることを模索していきたいと強く考えるようになりました。
そこで、この報道ガイドラインを、LGBT 法連合会、そしてこの想いに共感していただいた報道機関の記者有志とともに、当事者・報道機関のそれぞれに宛てたものとして策定しました。

LGBT 法連合会と記者有志の対話の中では、改めてお互いの文化や認識の違いに気づかされました。ガイドライン執筆に当たっては、その学びを活かしながら、実際に起こったケースから実態を知ってもらうこと、お互いが対応できることをそれぞれまとめました。

ぜひ、このような想いを受け止めていただき、今一度このガイドラインに記載された事項を読み込んでいただければ幸いです。

LGBT 報道ガイドライン - 性的指向・性自認の視点から -

編集・発行	：	性的指向および性自認等により困難を抱えている当事者等に対する 法整備のための全国連合会 (通称 : LGBT 法連合会) E-mail : info@lgbtetc.jp　WEB : http://lgbtetc.jp/
発行日	：	2019 年 3 月 7 日　初版　発行
デザイン	：	一般社団法人 fair
協力	：	記者有志
頒価	：	500 円

LIVE
NEWS
REPORT
LIVE
NEWS
WORLD